



David Duband

オートコートオートコートの地から珠玉のワインを世界へ

ニュイサンジョルジュから東へ斜面を登り、車で15分ほど奥地へ進んだ丘陵地、オートコート。

集落は坂道ばかり、ブドウ畑が散立するただ中に、ダヴィドのワイナリーが存在する。

91年に父のドメーヌを継承。現在23のアペラシオン、約17ヘクタールの畑からワインを造る中堅規模のドメーヌである。

生ける「伝説」を引き継ぐことになった好機

ダヴィドの父ピエールはボーヌの協同組合に葡萄、あるいは葡萄果汁を売って生計を立てていた。またニュイサンジョルジュの1級畑オートレイは所有者から耕作、栽培を委託されていた。その所有者は老いて引退するにあたり、パリの法律家フランソワ・フュイエに畑を売却した。フランソワはピエールとの栽培契約の継続を歓迎した。ただし協同組合に葡萄を売るのではなくドメーヌでワインを造ることを条件とした。かくして、醸造学校を卒業後、兵役に就いていたダヴィドは91年の収穫に間に合わせる形で軍服を脱ぎ捨て、葡萄樹と葡萄も協同組合から引き揚げた。ここからフランソワ・フュイエとの関係が始まる。フランソワは2005年に惜しまれつつ引退した生ける伝説ジャッキー・トルショの畑を全て買い取り、ダヴィドとワインを折半する契約で貸与した。更に2009年にはルイ・レミーのグランクリュを2つ買い取り、これもダヴィドの縄張りとなった。

• PORTFOLIO

- シャンベルタン グランクリュ
- ラトリシエール シャンベルタン グランクリュ
- シャルム シャンベルタン グランクリュ
- クロドラロッシュ グランクリュ
- エシェゾー グランクリュ
- クロ ヴージョ グランクリュ
- ジュヴレシャンベルタン コンボット プルミエクリュ
- モレサンドニ クロ ソルベ プルミエクリュ
- モレサンドニ ブロック プルミエクリュ
- シャンボールミュジニー サンティエ プルミエクリュ
- シャンボールミュジニー グリュアンシェル プルミエクリュ
- ニュイサンジョルジュ オートレイ プルミエクリュ
- ニュイサンジョルジュ プロセ プルミエクリュ
- ニュイサンジョルジュ シャブフ プルミエクリュ
- ニュイサンジョルジュ プリュリエ プルミエクリュ
- ジュヴレシャンベルタン
- モレサンドニ
- シャンボールミュジニー
- ヴォーヌロマネ
- コートドニュイヴィラージュ
- オートコートドニュイ

ワインメイキング

父ピエールのワイン造りをサポートしつつ、母方の親戚にあたるモレサンドニの名門ピエール・アミオや、義理の兄弟にあたる（ジョセフ）アルローで研鑽を積み、

同じくモレサンドニの大スター、デュジャックのワインを理想とした。またアルマン・ルソーからも影響を大いに受けている。

つまり、ダヴィドがワイン造りを始めたころに巷を席卷していた強い抽出と新樽熟成によるストロングスタイルを嫌い、早めの収穫、ソフトな抽出、樽香があまりつけないようブラッシュアップしてきた。

また2006年にトライアルで始めた「ペディセル」アプローチ、すなわち葡萄房の主軸の茎から粒をつないでいる細く小さい茎の位置でカットして、主軸の茎は使わずに粒とその小さい茎を発酵させるメソッドを取り入れている。これは莫大な手間を必要とするため、グランクリュと一部のプルミエクリュにのみ採用している。

2007年からスタイルを変えたと語っているが、近年は村名クラスでも一部全房発酵を取り入れ、ペディセルの比率もヴィンテージによっては下げることで温暖化による熟度上昇に対応している。

ニュイサンジョルジュへ思い

ダヴィドは彼が造るワインの中でもニュイサンジョルジュに特に思い入れが強く、ニュイサンジョルジュのワインについて語るときはあからさまに熱が入る。ジュヴレ〜ヴォーヌロマネのワインは美味しくて当然、それより石灰が強いニュイサンジョルジュのミネラル感をいかに表現して、かつワインとしてのバランスを保ち、美しく仕上げるかに腐心しているように思われる。

実際、ダヴィドのワインはシャンボールミュジニーよりニュイサンジョルジュの方が色も淡く、飲んでみても一般的な印象と逆となることが多い。

しかし余韻には強靱なミネラルがあることでニュイサンジョルジュの土壌を想起できるテロワールのワインといえる。

バトンを次世代へ

現在26歳の長男、ルイ・オーギュストへ権限移譲の準備を着々と進めている。長女のセレニーはプロヴァンスで勤めているそうだが、2021年に新しく造ったキュヴェに彼女の名前を付けたあたり、将来の参画もありそうだ。

2018ヴィンテージからはドメーヌ指揮の前準備として買いブドウによるネゴシアンラインをルイ・オーギュストに任せている。彼は既に二児（しかも双子！）のパパであり、孫ができたダヴィドは奥様との優雅な余生を楽しみにしている節があった。一般的には引退するにはまだまだ早い年代だが・・・

ちなみに、孫にも等しい、まだ小学生の次男がいる(笑)